



TITLE:

(随想)ハイティーンと淋疾

AUTHOR(S):

大熊, 博雄

CITATION:

大熊, 博雄. (随想)ハイティーンと淋疾. 泌尿器科紀要 1961, 7(3): 327-328

ISSUE DATE:

1961-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/112116>

RIGHT:

泌 尿 器 科 紀 要

第 7 卷 第 3 号

昭和 36 年 3 月

随 想

ハ イ テ ィ ー ン と 淋 疾

日本大学教授 大 熊 博 雄

2月10日の朝日新聞に“「少年法」に再検討のうごき”と題して、少年法では20才未満，児童福祉法では18才未満が少年であり，労働基準法では15～18才が年少労働者となっており，各省や法律によつて少年の解釈がまちまちである．警察庁調査によると14～17才の兇悪犯が年令別では最高位を占め，その増加率も上昇カーブを描いているという．同庁保安局は17才でも肉体は完全な成人，しかし考え方は幼稚であるとしている．西独の場合は少年は17才まで，18～23才は青年，24才以上が成年となつているという．日本でも関係官庁協議の上，少年法の年令引き下げの再検討すべきだとしている．以上が記事の大略であるが，杉野氏等の“一般少女と非行少女の身体発育状況の比較”（矯正医学，7：2）や曾爾氏等の“非行少女の健康調査”（生物統計学雑誌，5：3），売春防止法施行後における売春婦性病の実態（その2）（東京都衛生局）等を見ると非行少女の身体発育は一般少女より下廻っているが，胸囲のみは平均を上廻っており，82.4%が性交歴を有し，知能指数は半数以上が平均以下であるが，精神診断ではほとんどが準正常者であつたという．私は新聞の記事や手近にあつた非行少女に関する文献をみ，彼等の間の性病特に淋疾の感染程度や近頃外来で感じていたことを取り挙げ私なりにその性態を眺めてみた．

東京都衛生局の街娼の淋疾についての報告をみると，34年度中に検挙された3,471名中未成年者は307名で，このうち淋菌保有者は57.3%にのぼっている．これら未成年街娼は年々増加の傾向にあるという．また先日機会をえて少年鑑別所に入所者の淋疾罹患状況を昭和31

	被 検 数	淋 菌 陽 性	%
31年 男	5,507	67	1.22
女	568	85	14.96
計	6,075	152	2.50
35年 男	7,514	67	0.89
女	829	157	18.93
計	8,343	224	2.57

年と35年の各1年間の調査を試みた。その数値は次表の如くで、街娼よりは勿論罹患率は低いが31年と35年と比較してみると少女ではかなり増加している。このような数字をみると、未成年街娼は半数以上、非行少女では10人中2名が淋疾にかかっていることになり、警察の網にかからない少女にも淋菌保有者がかなりの率にあるものと想像され肌寒さを感じる。

この間或る警察に売笑の疑いで検挙された17才の少女を診る機会があつた。問診して驚いたことに、満1才になる子供があり、同棲者は20才で無職、浅草の山谷に居住しているという。淋菌保有者であり、知能はさほど低いとは思われなかつた。このようなケースは少ないものと思うが、20才前の若さで家庭をもち経済的な裏付けを自ら働き出せる者は特種な人々にかぎられ、一般には親の保護下にあるか、親元を離れて働いても一人の生活で一杯であろう。精神的に未熟な彼等が無軌道に結婚しても経済的に破綻し、転落して行くのは当然のことであろう。曾爾氏等の非行少女の家庭環境の調査では全例1,211名中父母健在が過半数の55%を占め、母のみ健在な者19.8%、父のみ健在11.9%、父母死別7.9%であつて、われわれは父母死別者が過半数を占めているのではないかと推察していたが結果は父母健在者が大部分であつたという。義務教育を終え上級学校へも進学せず、良き指導者も友もない者は読書の選択もできず。手近に入手できる下級な雑誌を読むことになろう。卑近な例をあげれば一部の週刊誌がその好例で、なかには性的にはなはだ露骨な小説や記事があり成人が読んでも如何かと思われる内容のものが屢々見受けられ、もし肉体的にはほぼ完成されていても精神年令の成人に比し低い彼等が読んだ場合の性的刺激の強さは想像を越えるものがある。

最近性的神経症の少年の患者が多い。彼等のうちには手淫を正常行為と自から云い、我々が不正行為であると納得させるのに困難な場合がある。昔はこのような患者は大学の学生が多かつたが、昨今は中学生、高校生に多い。この現象は何物かにより挑発されているためと思う。1959年ロンドンで行われた万国性病協会で英国の一会員が、学会で配布された印刷物にあつた週刊のロンドン案内を取りあげ、その中の一頁を例にとり、このような広告が青少年に与える影響は大きい。ティンエジャーの性的犯罪の誘因となると力説していた。週刊ロンドン案内の内容は私がみたところではレストラン、キャバレー、映画、ショウ等の広告であり、例にとつた頁はヌードショウの写真入りの所で、日本の一、二の雑誌の内容の方が露骨なように思われた。英国の人は我々に近い考えの人も居るのだと当時感じたことを思い出す。

近着の *Acta Dermato-Venereologica*, Vol. 40, p. 393 (1960) に *A Survey of Female Patients with Gonorrhea at St. Görans Sjukhus, 1954-58.* と題する発表があり、その内容は主として治療に関しての報告であるが、5年間に診療した女子淋疾患者の年別と年令別を初めに分類観察している。これによると1955年前後は20才代の患者数が各年令層中最高を示しているが、近年は漸減し、10代は年々増加し58年には20代を上回っている。著者 W. Enfors はこの10才代を注目してか13~16才を特に別掲している。このことについては数字以外になにも記載されていないが恐らく言外に何にか訴えているように思う。その数を参考までに再記すると下記のように、1958年の10代の淋疾数は約210名だという。いづこの国で

患者数	1954	1955	1956	1957	1958
	582	560	608	574	539

13~16才 13 (2.2%) 16 (2.9%) 34 (5.6%) 55 (9.6%) 96 (17.8%)

もティンエーの性問題は頭の痛いことのようなのである。私は淋疾罹患率から日本の一部特種少年の様相を観察し、それを元に彼等の生態を推測したにすぎないが少年法を再検討するのはよいが、年令引き下げによりいたずらに牢獄の狭さを詫つことにもなりかねない。彼等に悪影響を及ぼすであろう雑誌や映画その他あらゆる点に根本的な対策を建て次代の日本を背負う若人の健全な肉体と精神を希う者は私のみではなからう。